

有森信二

靴音が高くなった。どこまでもついてくる。京介が路地に入れば路地へ、美容室の角を折れて石畳へ出れば石畳を響かせ、確かな足取りでついてくる。足早になれば靴音も早くなり、立ち止まれば靴音も止まった。

もう一度後ろを振り返った。クスやモチの街路樹の落葉が、川風に乾いた音をたて、微かに動いているほかには、石畳には音をたてるものなど何一つなかった。

京介は、折れてきたばかりの美容室の角を見やった。自分を窺っている人影があるかもしれない。人影は角を曲がったばかりの電柱のあたりに潜んで、じつと自分の背後に忍び寄る瞬間を狙っているのかもしれない。

狭い公園のベンチを見付けると腰から崩れ落ちた。煙草を二口吸った。三口目に口をつけないままの長い灰を、指ではたいた。灰は一本の紙巻きの形で、折りからの風に吹き上げられ、ズボンや靴の上に舞い落ちた。

足元で、蚯蚓が蠢いていた。蚯蚓は、場違いな場所に這い出たらしく、半ばひからびながら、それでも強靱なねばりを見せ、既に砂利道を二メートルもよぎっていた。

が収まらなかった。何故逃げたのだ。何故フロントに連絡しなかったのだ。それより、何故佳菜子の首に手を掛けたのだ。

妻を亡くして三月にしかない。妻は五十五歳で死んだ。全身に転移した乳ガンだった。

ベッドの上に身を起こすことがやつとという状態になったとき、妻はまだ自由の利く手で枕を掴むと床に叩き付け、洗面器を投げ、シーツを裂き、そしてやにわに果物ナイフを京介の胸に突き立てようとした。驚いて京介がナイフを叩き落とすと、歯を鳴らしながら妻は、「殺してやる。あなたを殺してやる。分かっているんだ、あなたの考えていることは。私が死んだら、あの女を家に入れるんだ」と半狂乱になった。

妻の四十九日を手伝ってくれている佳菜子に、京介は、二、三日うちに大事な話があると言った。秘書の佳菜子は、研究室の仕事の合間に、妻の入院の世話から身の回りのことまで完璧といつてよい手際で処理してくれた。それは、教授である学部長と助教である秘書という関係を越えたものだった。「長い間、たいへんお世話になりました」

京介がセットしたフランス料理のテーブルに向かい合い、話を切り出そうとしたときだった。京介は最初、佳菜子が何を口にしたのか分からなかった。

「論文の方も、見通しがついているじゃないか」

この手で佳菜子の首を絞めたのだ。昨晚、いつものホテルの部屋に入り、佳菜子を抱きしめたのだ。もう一刻も離したくない佳菜子を自分の元に止めるためには、共に死ぬより外なかった。薬の効いた佳菜子は、京介が指先に力を含めたとき、やや荒い息をしたが、強く抗うことはなかった。少し開いた瞼を閉じてやり、丁寧に着衣を整えてやった。そして、自分も致死量の睡眠薬を飲んだ。

京介の目に朝日が映った。気付いたとき、窓の一隅から光が射していた。強烈な朝日だった。状況が分からなかった。カーテンを引くの忘れていたのだっただろうか。

京介の澱んだ頭に、切れ切れの記憶が一気に蘇ってきた。隣の佳菜子を覗き込んだ。静かに眠っている。いや、こと切れている。そつと髪と頬を撫でた。混乱した京介の頭に去来したのは、この場から去らねばならない、ということだけだった。強烈な五月の朝日の東が、京介を明々と射貫いていた。大急ぎで身繕いをする、朝日の東から避けることだけのために動いた。スリッパに足を取られ、尻餅をつき、ネクタイを何度も巻き直した。カバンを掴み、異様なほどに自分の痕跡が残っていないかということに思いを巡らせた。

逃げたのだ。佳菜子を置き去りにしたまま。京介の胸に、訳の分からない怒りが込み上げてきた。自分の昨夜来の行動が信じられなかった。頭を掻き毟った。動悸

「いったん実家の大分に身を寄せ、老いた両親の面倒をみながら、家庭教師の口でも探し、やってみたいと思います」と紅潮した笑顔を浮かべた。

佳菜子とは、学部三年次で京介のゼミに入ってきて以来、七年の関係になる。勉学にも優れ、助教であり秘書としても京介の手足となってくれた。研究旅行にも、学部長としての出張にも、アシスタントとして帯同するのが常であった。その佳菜子の命を絶つたのだ。睡眠薬の瓶を見せたときも抗おうとしなかった。こうなることを望んでいたのかもしれない、というほどの落ち着きさえ見せていた。

「奥様の後の役目は私には出来ません」眠りに付く前の佳菜子の言葉はこうだった。

京介のベンチからは、ホテルの玄関が見える。チェックアウトの時間はとうに過ぎた。救急車も、パトカーの音も聞こえない。入り乱れる人の姿もない。日は十分高く上った。

京介の頭は混乱した。自分はいったい何をしているのだ。足元の蚯蚓が、さらにメートル移動しているのを見た。そのとき、いよいよ高く、間近に靴音が聞こえ始めた。